



Scandinavian Designers

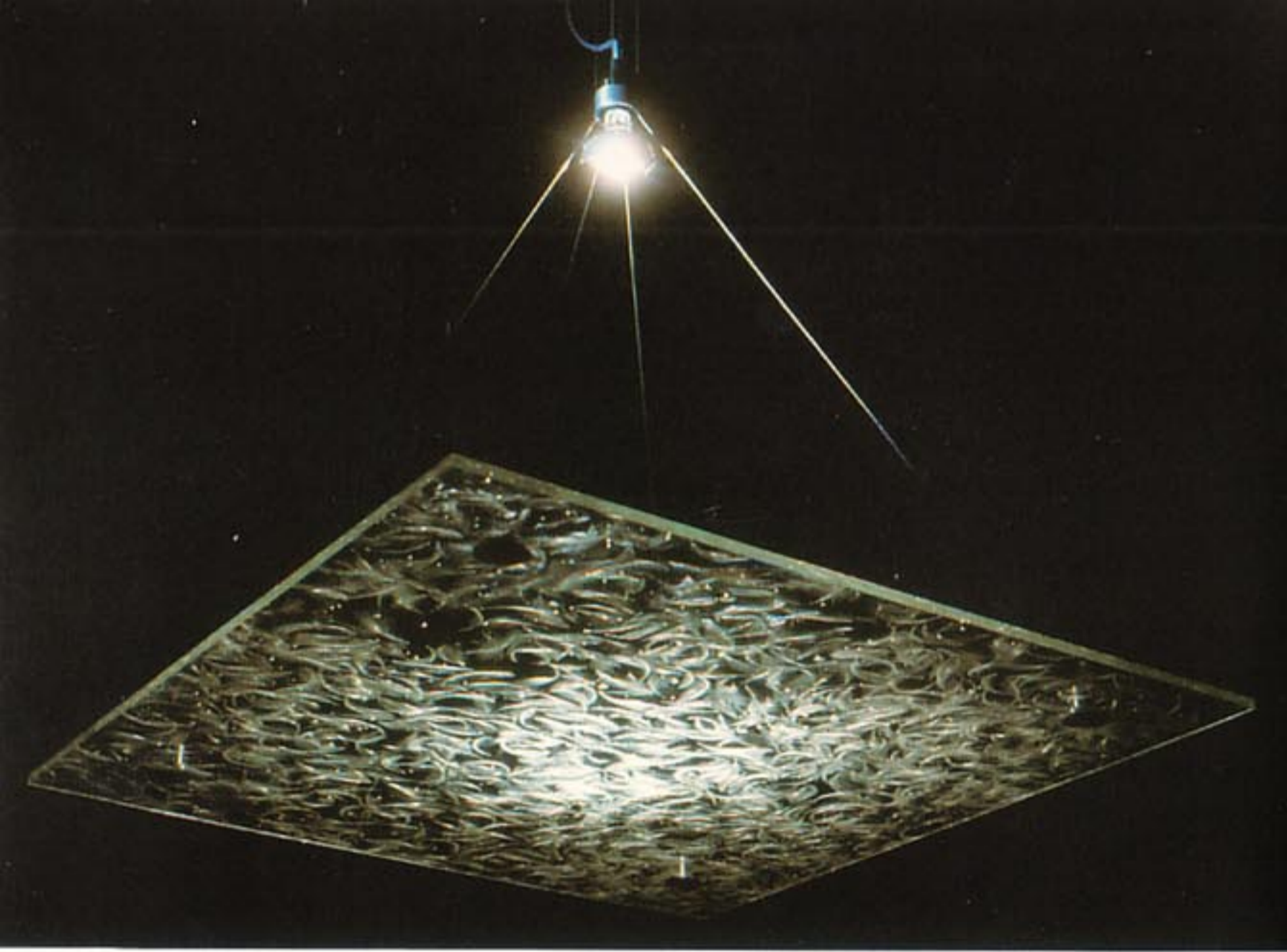
北欧 素顔のデザイナーに出会う旅

鈴木 緑 文・写真



スウェーデン、デンマーク、フィンランドの28人
 現代の北欧を代表するファニチャー、建築、ファッションなど
 各ジャンルのデザイナー28人にインタビューし、彼らの代表
 作品や著名ショップをオールカラーで紹介。

東京書籍



上：イタリアのカッペリーニ社のためにデザインした、ガラスの間に鳥の羽を挟んだライト
下：フライング・カーペット。厚いフェルトでできた、折りたたみ式ソファ



イルッカ・スツパネン Ilkka Suppanen

誰が呼んだかフィンランド・デザイン界の貴公子(?)と言われる
卓越したクリエイティビティには定評があり
プロダクトのほかに建築、展示会場のデザインなどを手がける
次世代のフィンランドのリーダーの一人となるのは間違いない実力の持ち主
現在スタジオには、イタリアやブラジルなど
世界各国の若手デザイナーをアシスタントとして抱える



照明、ハイウエーブ。パンチングメタルを波型に曲げてある。サーブのシーティングコンセプトを依頼され、製作したもの

Ilkka Suppanen

がした。何か心が心にひっかかっていたのは私なのかも知れないが。

その後、イルッカが東京に来た時に会う機会が持てた。明日の朝ヘルシンキに帰るからというイルッカを無理やり新宿のパークハイアットのバーに連れて行った。高層ビルの四階にあるバーは竹林があり、和紙を通した柔らかな光がとてもムードのあるバーだ。ヘルシンキにはない大都市東京ならではの、と思っただ場所だ。窓から見える綺麗な星のような東京に夜景にイルッカの目は明らかに輝いていた。東京で会ったイルッカは、もうおそろおそろ会った前述のイルッカとは別人だった。

イルッカのデザインはしかし、本当にロマンチックだ。と形容してイルッカが喜ぶかどうかは分らないが。フライング・カーペットといい、照明といい、オーガニックなラインで作品に夢がある。学生時代からアメリカやオランダに住んだり、引越しを繰り返してきたという経験がイルッカにはある。それで彼が作品にロマンを込めるようになったのだろうか。ロマンばかりではデザインはできない。イルッカのデザインがユニークなのは言うまでもないけれど。

イルッカは二〇〇〇年から〇一年までスノウクラッシュのクリエイティブ・ディレクター

を務めた。また、車のサーブのシートのデザインをしたり、通信機器のノキアのリサーチプロジェクトを請け負ったり、と活動の幅はインテリアデザインに留まらない。友達のアドバイスで建築をヘルシンキ工科大学で勉強することになったイルッカだが、その後小さいスケールのデザインもしたい、ということとでUIAHでデザインを勉強している。そこで講師も勤めていた。

二〇〇三年の夏。エルデコでイルッカの自宅の取材をすることができた。私が撮影したわけではないので、ここでは紹介できないキヤクターの通りのシンブルでモノの少ない家だった。家はまだまだ発展中と言うが、気が向いたらすぐに引っ越せるように、とモノは少なくしているのだと言う。でも、注意深くインテリア小物を選んでいたり、完璧主義らしい一面も見え隠れする。仕事ではコンピュータを駆使しているイルッカだが、家にはコンピュータがない。家で仕事をし、目を覚ますとコンピュータが目に入る私の住環境からすると本当にうらやましい。仕事から離れて休息するオトコの隠れ家とも言おうか。イルッカの家が変化するように、彼が活躍していくのか目が離せない。



イルッカも九七年のミラノ・サローネでスノウクラッシュとしてヴァルヴォモらと共に鮮烈デビューを果たした。九五年には自身のデザインスタジオを設立。早くから注目されていたデザイナーではあるが、フェルトを使い折りたたみもできるというフライング・カーペットにはやはり目を見張った。フェルトという北欧らしい素材を使いながら近未来的



上：ロコ・バッグ。ラップトップコンピュータや書類など、オフィスから家にそのまま移動できる、ワーキングシステム型バッグ
左：スタジオでくつろぐイルッカ。忙しいのだけれど、あたたかさを感ぜないキャラクターだ

なデザインをするあたり、底知れないクリエイティブティを感じられる。九八年には大御所デザイナーのエットーレ・ソットサスを選ぶヨーロッパの若手デザイナー四名の一人に選ばれた。

イルッカとの出会いにも逸話がある。あるデザイン誌がイルッカのことをヴァルヴォモと混同してしまったため、それを読んでイルッカが電話で抗議をしてきたというのだ。その後、同じデザイン誌でヘルシンキ取材があり、イルッカと対面することになったのだが、その話を聞いていたので、またまた怖い人かも、と怖気づいていた。フィンランド人は概して初対面の場合、スウェーデン人やデンマーク人よりも硬い印象がある。イルッカはまたブラックホワイットのモノクロの服しか着ない、どこまでもクールな印象なのだ。それにプラスして電話抗議である。おそろおそろイルッカのスタジオにお邪魔し、取材を進めていくうちに、鳥の羽毛をばさんだガラステーブルを見つけた。イタリアのカッペリーニ社のためにデザインしたテーブルだったのだが、「ポエティックなデザインですね」と私。

「ポエティックかあ。いい言葉だな」と、その時初めてイルッカの心にひっかかっていた何か溶け、本物の笑顔が見られたような気が